



👁️👁️ みどころ

100歳まで“生涯脚本家”を買った橋本忍は、『日本沈没』(73年)や『砂の器』(74年)で有名だが、さて本作は？シネ・ヌーヴォで開催された“生誕百年追悼橋本忍映画祭”で、法廷モノに詳しい私ですら知らなかった1963年の“裁判ミステリーの傑作”をはじめ鑑賞。

本作は、冒頭の殺人行為で犯人を明示！そんな脚本で大丈夫なの？そう思っていると、アレレ！その直後に真犯人(?)が緊急逮捕されたから、さらにアレレ……。こりゃ面白い！なるほど「まさに名人芸ともいえる緻密で重厚な社会派サスペンス」だ。

検察側の黒星も、コンプライアンスを徹底させればマスコミは絶賛！一度はそんな甘い結末も想定されたが、なるほど、なるほど……。

11月20日夕方の日産のゴーン会長逮捕のニュースにはビックリだが、本作もビックリの連続。そんな橋本脚本の冴えをしっかりと楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■脚本家・橋本忍が100歳で死去！その追悼を！■□■

朝日新聞「ひと」の欄に、“100歳を迎えた日本映画界伝説の脚本家”という肩書きで橋本忍が取り上げられたのは2018年5月29日のこと。そこでは、自宅で開いた100歳の誕生祝いに弟子である山田洋次監督や脚本家の中島丈博が覗けつけたことが報道され、最後には「山田監督86歳。野上さん91歳。映画界の伝説の人を、ちゃん付けて呼ぶ。伝説の中の伝説、まだまだ健在なり。」と書かれていた。

ところが、その橋本忍が同年7月19日に死去したことが報じられ、各紙は一斉に追悼

記事を掲載した。私が邦画の中で断トツのベスト1に挙げるのは、松本清張の原作を橋本忍の脚本で野村芳太郎が監督した『砂の器』だから、その死去は大ショック。しかし、100歳の天寿を全うしたのだから、それは仕方ない。しかして、シネ・ヌーヴォは11月3日から30日まで橋本脚本作品、監督作品、計20作品を一挙上映する“生誕百年追悼橋本忍映画祭”を組んだからすごい。『砂の器』と『日本沈没』はこの機会に再度鑑賞するつもりだが、“裁判ミステリーの傑作”と言われている本作(63年)を知り、こりゃ必見!とシネ・ヌーヴォへ。

■□■冒頭から迫力満点!若き日の仲代達矢に注目!■□■

映画冒頭は、不倫関係にあった宗方治正弁護士(千田是也)の妻・靖江(淡島千景)から、「どうせ殺せないでしょう。男妾のくせに!」とバカにされた若手弁護士・浜野一郎(仲代達矢)が、かっとなって靖江の首を絞めるシークエンスからスタートする。白黒の映像だが、アップで映るこの2人の争う姿を観ただけで迫力満点。カメラワークの巧みさも、さすがだ。

ちなみに、ここでは2人がもみ合っている中で勢い余って電話の受話器がはずれたことが、ラストのあつと驚く展開で明らかにされる貴重な伏線になるのだが、この時点でそれに気付く人は少ないだろう。また、首を絞められてぐったりした靖江の姿に愕然としてその場から逃げ出した浜野が、歩いている途中でバイクに乗った青年と出くわし声をかけられるシーンも登場するが、これはいかなる伏線に……?

冒頭でそんな“テーマ”が提示された後、スクリーン上はお葬式のシーンになるが、ここでは妻の訃報を聞いて出張先から急いで戻った宗方が友人の慰めの言葉に対して「犯人が目の前にいたらこの手で殺してやりたい」と言っていたから、宗方のすぐ近くに座っていた浜野は一体どんな気持ちでそれを聞いていたのだろうか。

本作は1953年公開の映画だから、今から55年も前のこと。したがって、靖江を演ずる淡島千景を含めて俳優陣が懐かしい人ばかりであるのは当然だが、本作導入部では浜野を演ずる仲代達矢のフレッシュさが目立つ。『人間の条件』6部作(『シネマ8』313頁)は1959年から1961年だから、それ以前の彼がもっと若かったのは当然だ。ちなみに、『春との旅』(10年)(『シネマ25』140頁)で『グラン・トリノ』(08年)(『シネマ23』48頁)のクリント・イーストウッドとよく似た(?)頑固な老人役を演じて圧倒的な存在感を見せつけたベテラン俳優・仲代達矢が、若い時にはこんなにハンサムで芸達者だったということに、多くの人がビックリするだろう。

■□■この脚本では最初から犯人が明確に!?その当否は?■□■

このように、本作における橋本忍のオリジナル脚本は、冒頭から靖江殺しの犯人を観客に明確に見せる形で始まる。したがって、女中のキヨ(菅井きん)の報告を受けて犯行現

場に駆けつけてきた平尾刑事（西村晃）の事情聴取が始まると、観客の興味は事件の2時間前くらいに宗方弁護士の家を訪れていた浜野はどう弁明するのかに集中してくる。靖江の死亡を確認したのは女中。そして、女中が外に出ている間に奥様と会っていたのは浜野だけ。すると、犯人の疑いは必然的に浜野に・・・？

平尾刑事の質問の仕方は丁寧だったが、ひょっとして彼は既に犯人は浜野に違いないと目星をつけているのかも……。そんな風に考えられているかもしれない浜野が少しどころもどろになりかけたのは当然だが、そこに駆け込んできた別の刑事が「犯人が緊急逮捕されました！」と報告したから、アレレ……。そして、これにて浜野は一安心。以降、ノホンと……。

『砂の器』は、殺人事件の現場に駆けつけてきた刑事が「カメダ」と聞いた言葉から長い長い捜査が始まり、犯人が誰かはラストに至るまで判明しない。そして、①この刑事の捜査の物語、②ハンセン病に罹患する父と子の巡礼の旅の物語、③有名な音楽家が自作のピアノ協奏曲を発表する演奏会の物語、の3つを同時並行させながらクライマックスに至っていく。したがって、ここでは深い深い人間ドラマの中に犯人捜し（推理）のミステリー（楽しさ）が見事に混在していた。ところが、本作の橋本脚本は、冒頭から靖江殺しの犯人が浜野弁護士であることを明示！？さて、その当否は？

■前科4犯の男を演じる井川比佐志の怪演に注目！■

『三度目の殺人』（17年）では、役所広司扮する中年男のコロコロ変わる供述に、福山雅治扮するエリート弁護士が翻弄されていた（『シネマ 40』218頁）。それと同じように、本作では担当検事の落合克巳（小林桂樹）は、靖江殺しとその部屋の中にあつた大量の貴金属類を盗んだ犯人として緊急逮捕された脇田正吉（井川比佐志）のコロコロ変わる供述に翻弄されるので、それに注目！

大量の宝石類を所持して宗方邸の近くをうろついていた脇田は前科が4犯もあり、シャバより刑務所生活の方が長いくらいだから落合検事の取調べにも悠然としたもの。ところが、脇田は宗方邸に強盗に押し入ったことは認めたものの、自分が部屋に入った時に靖江は既に死んでいたと供述し、殺人罪を否認したから、アレレ……。しかし、百戦錬磨の落合検事がそんな供述に「ああ、そうですか」と納得するはずはなく、執拗に続く追及について脇田も音をあげ、靖江殺しを自白したから、お手柄だ。もっとも、靖江の首を絞めた腰紐に、脇田の指紋は付いていたの？その他、本作では脇田の殺人行為についての物的証拠が不十分で脇田の自白に頼っているところが、私には気がかりだったが……。

こんな思いがけない展開、状況を、浜野には“棚からぼた餅”と言うのだろう。だって、自分が靖江の首を締めて殺したと自白する寸前のところで、突如脇田が殺人犯として登場してくれたのだから。もっとも、そんな場合、良心の呵責に苦しむのが当然だから、本作中盤では、落合検事による脇田取調べのシークエンスと対比しながら、浜野が良心の呵責

に苦しむ姿を観察する必要がある。ちなみに、浜野との婚約が決まっていた製鋼会社社長の娘、村松由紀（大空真弓）は、そんな浜野の微妙な変化に何となく気付いていたようだが・・・。

■□■意外な弁護士選任にビックリ！これぞ脚本の妙！■□■

明智小五郎の“探偵モノ”から、アガサ・クリスティの“推理モノ”に至るまで、殺人事件を巡るトリックやあっと驚く展開はどれも面白い。それと同じように、本作導入部で提示される靖江殺しを巡る状況設定は非常に面白いから、その後の展開も大いに楽しみ。いよいよこれからは脇田の公判が始まるから、本作は本格的法廷モノに・・・？そう思っていると、誰よりも犯人を憎んでいると公言していた被害者の夫である宗方弁護士が脇田の弁護士に就任したからビックリ。拘留所でその姿をみてビックリする脇田に対して、宗方弁護士は“若いときから死刑廃止論者として活動してきた立場を守るため”と説明しているが、さて、その合理性は？

浜野は学生時代から宗方弁護士の世話を受け、弁護士登録後は宗方の事務所で働いていたから、宗方が脇田の強盗殺人事件の弁護士に就任するとなれば、自分も共同受任して手伝うのは当然。しかし、これから真犯人の自分がそれを隠して公判廷に立ち、脇田の弁護士としてホントにちゃんと弁護できるのだろうか？そんな不安を内包したまま、スクリーン上では公判手続が進んでいくが、そんな設定をした橋本忍脚本の妙に拍手！ちなみに、日本の検察制度では、取り調べをする“捜査検事”と公判に立ち会う“公判検事”は同一人物ではなく別人の担当とされているので、落合検事のお仕事は起訴したところでおしまいだ。殺人の物的証拠はたしかに不十分だが、脇田の詳細な自白で十分。落合検事もその上司である東京地検刑事部長の吉岡（小沢栄太郎）もそのように“公訴の維持”については自信たっぷりだったが・・・。

■□■後半からは落合検事の“良心”がテーマに！■□■

ドストエフスキの『罪と罰』や『カラマゾフの兄弟』は人間の心の奥深くに潜む“良心”が大きなテーマになっているが、橋本脚本による本作でも、全編を通じて浜野弁護士の“良心”がテーマになる。そのうえ、本作後半からは、浜野弁護士の執拗までの“無罪の主張”に不審を抱いた落合検事の良心がテーマになるので、それに注目！

東京地検の現職の検事が、弁護士や業者と一緒に銀座のクラブで派手に飲み会を・・・？コンプライアンスがやかましくなった今ではそんな風景はないはずだが、私が弁護士登録した1974年当時はそんな関係は結構あった。したがって、それより10年前の1963年当時なら、それは日常茶飯事・・・？それはともかく、法廷での議論ではなく、銀座のクラブの席で浜野弁護士から脇田は無罪だと主張されたのでは落合検事はたまったものではない。これでは、せっかくの楽しい酒の席も台無し。浜野は何と非常識な弁護士だ。

当然、落合はそう思ったが、同時になぜ浜野はあんなに執拗に脇田の無罪を主張するのだろうか？そう考えると落合は矢も盾もたまず、いくつかの気になる点についての“補充捜査”を吉岡刑事部長に願ひ出ること。これはすべて落合の検事としての良心に基づくものだが、それに付き合わされる平尾刑事は迷惑千万。だって、警察は検察に事件を送致した段階で捜査を終了しており、刑事は常に目の前の事件の捜査で忙しいのだから。しかし、検察には補充捜査の指揮命令権があるから、落合からそれを命じられると平尾刑事は仕方なし。

そこで、平尾刑事が落合と共にあちこちあたってみると、アレレ・・・？アレレ・・・？靖江殺しの犯人は脇田ではなく、ひょっとして当時靖江に最も親しくかつ死亡直前に宗方邸に入り、靖江と2人きりになっていた可能性が高い浜野弁護士の可能性が・・・？そんな疑惑が生じたが、既に公判では脇田に対して死刑が求刑されていた。そんな時点で、検察側はどうすればいいの？自らのミスや黒星を覚悟して脇田への殺人罪の起訴を取り下げ、新たに浜野弁護士を起訴するの？それとも・・・？落合検事も上司の吉岡刑事部長も、そんな苦渋の選択を迫られたが・・・。

■□■ 検察のこの英断に拍手喝采！なるほど、なるほど。 ■□■

本作ではこの補充捜査の段階までのストーリーでも橋本脚本の冴えが目立つが、補充捜査で新たに得た資料（証拠）を基に落合検事が、ある場所（密室）で浜野弁護士と2人で対峙する脚本は、さらにすばらしい。もちろん、落合は新たな容疑者を発見したと公表して浜野を逮捕し、検事v s 被疑者として対決することも可能なのだが、なぜ落合はそうしなかったの？そこにはさまざまな思惑や利害が絡んでいたが、この密室（？）での2人の会話は真剣勝負であるだけに、見どころ十分だ。1つ1つの物的証拠を突きつけて自白を迫る方法もあれば、あくまで相手の良心に訴えかけて自らの口で説明してもらおう方法もあるが、落合がとったのは後者。そこでベテラン検事の巧みな手法には、ほとほと感心させられる。

しかして、どこまでも己の良心に問いかけられた浜野は、自らの犯行であることを自白したから、さあ翌日の新聞は？さる11月20日夕方のTVでは、日産自動車の代表取締役会長、カルロス・ゴーン逮捕のニュースが駆け巡り、翌21日の新聞各紙ではその記事がトップを占めた。ゴーン逮捕は大事件だが、脇田が靖江殺しの犯人ではなく、浜野弁護士がその真犯人だったというのはそれに匹敵するほどの大事件・・・？かどうかは別として、大事件であることは間違いなし、検察側の失態であることも明らかだ。

しかし、落合検事は吉岡刑事部長の了解の下で、率直に検察の黒星を認め、再捜査、補充捜査の意義を強調したから、意外にもマスコミは検察側の勇気と信義を絶賛！見栄を張らずに黒星を認め、今で言うコンプライアンスの観点から脇田への起訴を取り下げ、浜野弁護士を殺人罪で起訴したことが結果的に良かったわけだ。すると、転勤間近だった落合

次のポストは？そんな期待も膨らむ結末に。誰もが一瞬、そう思ったが・・・。

■□靖江は死んでいなかった！なぜなら？すると？■□

私の大好きな松本清張の小説を映画化した『霧の旗』（65年・倍賞千恵子版、77年・山口百恵版）では、高名な刑事弁護士が一旦は依頼を断った事件を調べていくうちに容疑者の利き腕が左手だったということに気付く、愕然とするところから事態が大きく動いていった（『名作映画から学ぶ裁判員制度』153頁）。それに対して、本作では浜野が靖江の首を絞めてもみ合う中、電話の受話器が外れるところがミソ。松本清張の『点と線』では電話帳のように分厚い“時刻表”が重要な小道具となり、1日に1回4分間だけ、13番ホームから15番ホームを見渡せるというトリックが最大のポイントになった。それに対して本作では①靖江殺し、②浜野の逃走、③脇田の屋敷内への潜入、④靖江の宝石盗り、のどこかの合間に、電話局から電話が入っていたのでは？そんな疑問がポイントになる。そこを異例の補充捜査でも、落合検事と平尾刑事が調べることによって、事態が更に大きく動いていくことに・・・。

もっとも、そんな疑問点が浮上したのは、既に脇田への殺人罪の起訴を取り下げ、浜野を殺人罪で起訴した後。去る11月10日に観た『search サーチ』（18年）でも、一人娘の失踪事件を担当する献身的な女刑事が実は娘殺害の犯人だった、という最後のどんでん返しが面白かったが、本作でも、それに匹敵するほどの“最後のどんでん返し”が待っているのだから、それに注目！かねてから不倫関係にあった靖江から「男妾！」とバカにされてかっとなった浜野はとっさに靖江の首を絞めたが、ぐったりした靖江の姿にビックリ。てっきり、これで靖江は死んでしまったと思い込んだ浜野はその場を離れて逃げ出したわけだ。ところが何のことはない、靖江は一時的に意識を失っただけで、死んでいなかったらしい。なぜなら、その後電話に受話器が外れていることに気付いた電話局の係員からの電話に靖江が出ていたのだから！すると、浜野の行為によって死んでいなかった靖江を殺したのは、やはり脇田！“外れた受話器のトリック”からそんなあっと驚く真相が浮かび上がってきたから、さあ大変だ。そこで、落合検事が宝石盗の罪で服役している脇田に面会すると、脇田は高笑い。そして、「検事さんから靖江殺しの犯人は浜野だと説明してくれたのに、わざわざ自分がそれを否定する必要はないでしょう」とシャーシャーとしたもの。なるほど、そうきたか・・・。

こんなことがあるから、人間のやる裁判には誤謬がありうるわけだ。そして、そうだからこそ、死刑廃止論がそれなりの根拠を持つわけだ。これによって、落合は出世の道が閉ざされ、田舎の検察庁に左遷されることになったが、きっとそれ以上にいい勉強ができて、人間的に大きく成長したはずだ。橋本忍のオリジナル脚本による法廷モノの傑作に拍手！

2018（平成30）年11月26日記